

【佐藤一斎】

安永元(1772)年10月20日、美濃岩村藩(現岐阜県恵那市岩村町)の家老佐藤信由のぶよしの次男として江戸浜町の下屋敷(現東京都中央区日本橋浜町)で生まれました。田沼意次おきつぐが家老となって実権を握り、田沼時代が始まった年です。名は坦たん、字は大道たいどう、一斎は号、他に愛日楼あいじつろう、老吾軒らうごけん、江都こうとなどの号があります。初名は信行のぶゆき、通称は捨蔵すてぞう。

幼くして読書を好み、水練・射騎・刀槍などに優れ、小笠原流礼法を身につけていました。

34歳で朱子学の宗家林家の塾長となり、大学頭林述斎(岩村藩主松平乘蘊のりもりの三男)とコンビを組み、多くの門下生の指導に当たりました。

55才のとき、岩村藩主となった松平乘美のりよしの老臣に加えられ、「重職心得箇条」、「御心得向存意」を著し藩政に尽力しました。

天保12(1841)年、述斎が74歳で没したため、70歳で幕府の学問所「昌平黌しょうへいこう」の儒官(総長)を命じられました。

安政元(1854)年、83歳のとき、日米和親条約締結に際し、時の大学頭林復斎ふくさい(述斎の六男)を助け外交文書の作成などに尽力しました。

安政6(1859)年9月24日、昌平黌の官舎で没(享年88歳)。正に安政の大獄で揺れるなか、明治維新まで9年の激動の時代でした。

門下生には、佐久間象山、山田方谷、渡辺崋山あさかごんさい、安積長斎しやうなん、横井小楠などがいます。

一斎の教えが、幕末から明治維新にかけて新しい日本をつくった指導者たちに多大な影響を与えたと言われています。



【言志四録】

「言志四録」とは、「言志録」、「言志後録こう」、「言志晩録つらく」、「言志臺録ていらく」の全四巻を総称したものであり、内容は人生、学問、思想など多岐にわたり、修養処世の心得が1133条にわたって書かれた随想録です。

「言志録」の書名の由来は定かではありませんが、『論語こうやちやう』公冶長編に「蓋ぞ各々なんじの志を言わざる」とか、『書経しゆんてん』舜典の「詩は志を言い、歌は言を永くす」などから、【志を述べる言葉をとどめ残すもの】という意味からではないかと推測されます。

「言志録」は、佐藤一斎が42歳のとき書き始め、以後82歳で書き終わる「言志臺録」まで、四十余年にわたり書き続けたもので、指導者のバイブル・指針の書ともされ、特に西郷隆盛は101か条を選び出し「南洲手抄言志録」としてまとめ常に座右の銘としていました。

平成13(2001)年、小泉純一郎首相が衆議院本会議で、

「少くして学べば、則ち仕にして為す有り。仕にして学べば、則ち老いて衰えず。

老いて学べば、則ち死して朽ちず」(言志晩録60条)

を引用して生涯学習の大切さを表明したことで、この平成の時代に広く世に知られることになりました。

親子で読む言志四録

「おじいちゃんとおぼく」

～佐藤一斎さんからの伝言～

アニメ制作趣意書



「おじいちゃんとおぼく」アニメ制作委員会

趣意書

絵本「親子で読む『言志四録』おじいちゃんとおぼく～佐藤一斎さんからの伝言～」(特定非営利活動法人いわむら一斎塾発行)のアニメを制作し、物事の善悪や正邪が正しく判断でき、思いやり、感謝、けじめ、礼儀、規律など品格・品性を備え、私利私欲を捨て他人や社会のために働く人が多く育って欲しいとの「**佐藤一斎のこころ**」、「**日本のこころ**」を国内はもとより海外へ広く伝えるため、皆様の多大なご理解とご支援をよろしく申し上げます。

さて、『言志四録』は、江戸時代後期の美濃岩村藩(現岐阜県恵那市)出身の**佐藤一斎**によって書かれた随想録です。

内容は人生、教育、志、学問、読書、養老など人間として大切な生き方やあり方について心に触れる珠玉の言葉に満ちあふれ、読む者へ大きな励ましや勇気を与えてくれます。

「**特定非営利活動法人いわむら一斎塾**」では、平成18年(2006)2月、次代を担う子どもたちに、このすばらしい教養を自分を大切にしながら他人への思いやりや明るい社会を築くために高い志を抱いて育って欲しいとの願いを込め、わかりやすくまとめて絵本『**おじいちゃんとおぼく**』を印刷し恵那市の小中学生一人ひとりに配布しました。

以来、版を重ねること4版。2万冊以上が全国の子どもからお年寄りまでの多くの方に愛読されております。

また、あの東日本大震災直後、恵那市と交流のある岩手県釜石市の小中学生全員に『**小学生のための言志四録**』(いわむら一斎塾編著、PHP研究所発行)をいち早く配布し、「**心の復興**」へのお手伝いをさせていただきました。

その大震災後の日本人の相互扶助の心、道徳心の高さに海外が驚き、各国で日本と日本人が改めて高く評価されるようになりました。

このような折、『おじいちゃんとおぼく』に終始一貫する「**佐藤一斎のこころ**」、「**日本のこころ**」をアニメ化し、さらに多くの人たちにご覧いただき、一人ひとりの幸せと住みやすい平和な社会の実現に貢献したいと制作委員会を組織し、広く多くの方にご協力をお願いすることとなりました。

具体的には、教育アニメ制作の重鎮香西隆男さんをリーダーとするプロジェクトチームを立ち上げ、一意専心取り組んでいただくことになっております。

現在、日本のサブカルチャーとして海外でも圧倒的に支持されている「**MANGA・アニメ**」を通じて「**佐藤一斎のこころ**」、「**日本のこころ**」を発信し、**日本の伝統文化や日本国民の精神性**をわかりやすく伝えて行きます。

皆様にはこの趣旨をおくみとり下さり是非ご賛同ご支援下さいますようお願い申し上げます。

平成26年5月吉日

【アニメーションの概要】

●あらすじ

ちしん君(ちしん君=知新君:岩村藩校「**知新館**」から命名)という男の子は、岐阜県恵那市岩村町に引っ越してきたばかりです。近所のみっちゃんといっしょに岩村城に遊びに行き、知り合ったばかりのポンキチと三人でおにごっこをすることにしました。

ちしん君が隠れていると、なんと本物の鬼がのっしのっしと歩いてきます。ちしん君は驚き、慌てて古い建物の中に逃げますが、鬼に見つかってしまいました。ちしん君が「だめだ」と思ったそのとき、「コラッ! ポンキチ!」と怒鳴る声が聞こえました。いつのまにか一斎先生が現われ、鬼にばけたたぬきのポンキチをしかったのでした。

一斎先生は、昔この古い建物でたくさんの若者が勉強していたこと、勉強することに無駄なことは一つもないこと、勉強することは大好きな人たちを幸せにすることができることなどをちしん君に教えます。

最初のこの一話は、『言志四録』の一節「**少にして学べば、則ち社にして為すこと有り。社にして学べば、則ち老いて衰えず。老にして学べば、則ち死して朽ちず**」をわかりやすく、紐解いた内容になっています。また、おじいちゃんのアシスタント役として、岩村の古い町並みの家々にかかっている『言志四録』の書かれた彫板のイメージキャラクターの「**彫板君**」も現われます。

このようなストーリー性で岩村の街や恵那市各地の観光場所などをモチーフにしながらい『言志四録』をわかりやすく12話(全13話)で伝えていきます。



●アニメーションの仕様

- ①一話約10分のDVDを制作し、13話で完結予定です。(佐藤一斎の紹介も入れます)
- ②当面は一話ずつDVD版を制作しますが、完結後は13話をまとめてセットとしても対応します。
- ③アニメの総監督は香西隆男氏、音楽は佐々木多幸詩氏などが担当します。

スタッフ紹介

●総監督

香西隆男 ●こうざいたかお

昭和34年、国立東京芸術大学彫刻科卒業。同年4月、東映動画株式会社入社。昭和38年、東映動画株式会社退社。その後会社経営、フリーを経て、平成22年5月に(株)K・N日本アニメ企画会長に就任。現在千葉県八千代市で、若手の人材を育成しながら現役で活躍中。



【作品・受賞歴】

▶テレビシリーズ作画監督作品

「巨人の星」、「魔法使いサリー」、「おはようスパンク」、「はじめ人間ギャートルズ」、その他多数。

▶その他の主な作品

「赤い鳥の心」、「日本名作童話シリーズ」、「牛女」(ミラノ映画祭グランプリ)、「ごんぎつね」(文部省選定)、「お百姓の足、坊さんの足」(優秀映画鑑賞会推薦)、「おぼ捨て山の月」(文部省創選定、優秀映画鑑賞会推薦、教

育映画界最優秀作品賞)、「イソップ物語」(第13回モスクワ国際映画祭映画技術賞)、「おじいさんのランプ」(教育映画祭優秀作品賞)、「新ちゃんが泣いた」(教育映画祭優秀作品賞)、「金の小鳥」(教育映画祭優秀作品賞)

※上記作品を含め、10,000作品以上の制作に関わる。作品が多すぎて、正確な数字が判らないとは本人の弁。

●監督

永丘昭典 ●ながおかあきのり

長崎県出身のアニメーション演出家及びアニメーション監督。アンパンマン等で監督経験豊富な香西隆男の門下生。

●背景担当

河野次郎 ●こうのじろう

たのしいムーミン一家、ブラック・ジャック、白鯨伝説などを手がけたアニメーション美術監督。広島県出身。スタジオユニに所属した後、イメージルーム・ジローを設立、現在に至る。